

(銀のエンジェル賞 中学生の部)

まじないごっこ

中二・新村 夏生

「おーい！ こっち、こっち！」

「速いよー。ちょっと待って」

真夏の日差しで焼きつけられたアスファルトの上を、いくつもの足音がかけぬけていく。

あんまり変わってないな。駅の改札口から出てすぐに広がった景色を見て僕は思う。風に吹かれる田んぼの稲、遠くに見えた青い山、古い木造りの店が並ぶ商店街……小学校卒業と同時にここから引越して四年、僕が成長して高校生になった今も、変わらない景色だった。

ふと、商店街の一角に建った店が目にとまる。そこには、まだ幼い頃よく来た駄菓子屋が姿も変えず残っていた。

きょうは、まいちゃんとあそびます。

いっしょにおままごとをします。

わたしがおかーさんで、まいちゃんがおねーさんです。

わたしもまいちゃんも、おままごとがだいすきです。

「それにしても、今日は暑いねえ」

「八月は夏本番ですからね……」

本当に今日は……八月の中でも特に暑い。僕は缶ジュースのフタ

を開け、喉の奥まで流し込む。公園でも、小さな子供達が楽しそうに右へ左へ駆け回っている。僕の隣でペットボトルのお茶を飲んでいるのは、駄菓子屋のばあちゃん。

その後僕は、店の扉にかかった「開店前」の札を見て、来た道を引き返そうとした。そこで僕を引き止めたのがばあちゃんだった。ばあちゃんは僕を散歩に誘い、僕達は公園に来た。

ばあちゃんが、

「ところで」

と口を開く。

「名前、聞いてなかったね」

聞かれて初めて気付いた。そっか、ばあちゃんは僕の名前を覚えていないんだ、と。

「風浜聖治です。神聖の『聖』に治めるの『治』で聖治」

ばあちゃんが、

「そうかい、そうかい」

と言うように、何度もうなずいた。僕はその様子を見て、やっぱり覚えていないのか、と肩を落とす。よくよく考えてみれば当然だ。たくさんの子供達の中の一人の名前なんて、覚えているはずがない。実は僕達は、昔、会っていた。

思い出してみても、少し恥ずかしいのだが、僕は幼い頃、結構泣き虫だった。あの日も何があったのかは覚えていないが、僕は泣きながら駄菓子屋の前を歩いていた。そこで会ったのが駄菓子屋のばあちゃんだった。

「どうしたんだい？ そんなに泣いて」

「ぐすん。ぐすん……だってえ……」

「そうかい……じゃあ、ちよつとだけ目を閉じて、口を開けてごら

ん」

「ん…：あめ玉だ！ 甘くておいしいよ！ ばあちゃんありがとう…：でも、どうしてあめ玉を口に入れた後に、「一回鼻をつつくの？」
「これが、おまじないだからさ。幸せを運ぶおまじない」

懐かしいな…：おまじないか。今でも覚えている、僕にとって大切な思い出だ。でも、ばあちゃんが僕のことを覚えていないのは残念だった。それでは、ばあちゃんはあるおまじないも覚えていないのだろうか。

おままごとでは、おりょうりをつくることにしました。

わたしはおなべをつかいたかったのに、まいちゃんがとってしまいました。

わたしもおなべがほしくて、けんかになりました。

僕は公園で駆け回っている子供達に目を向ける。楽しそうに、笑顔をふりまきながら、遊んでいる。

「戦隊ごっこしよーぜ！」

「じゃあ、俺が赤！」

「僕は青やる！」

ごっこ遊びか…：幼い頃、よくみんなでやった遊びだ。でも、いっただったか気付いた。それがただの子供の遊びだったこと。いくら真似事をしたって本物にはなれっこないということに。あれ以来、ごっこ遊びはしていない。

他の人も僕と同じように感じているのだろうか。僕は、それについてばあちゃんに聞いてみることにした。この人なら、笑わずに聞いてくれる。この人なら、その答えを知っているかもしれない。そ

う思ったからだ。

「あの……」

僕は、自分の考えを話す。いや、ぶちまける、といったところだろうか。僕の疑問、思い、気持ち……言葉にしたら、少しすっきりした。

「……ということなんです」

「それもそうかもしれない。でも……」

「でも？」

「あたしはこう思うんだ。真似事でもいい。それは『カタチ』を作るんだから」

カタチを作る？ 分からない。ごっこ遊びは「カタチ」を真似ているだけで作ってなんていない。

「そう、実際になれなくとも、それに近づこうとする。そうすることで未来の『カタチ』、目指すものが見えてくると思うんだよ」

そうなんだ。だから「カタチ」を作るんだ。ついさっきまで、目の前にいた子供達は、遠くへ走って行ってしまった。ああやって成長していくんだな。その様子を見て、僕はそう思う。

きづく、だがしやさんのまえまできていました。

ここにくるとたくさんの方がいて、あんしんします。

わたしは、すわっておそらを見上げます。

あおくて、なんだかないてるみたいないろでした。

「今日は、ありがとうございます」

「いやいや、こちらこそいろんな話をしてもらって、楽しかったよ」

僕達は、駄菓子屋の前に着くと別れを告げた。するとばあちゃん

は僕に、

「ちよっと待って」

と伝えると店の中に入っていった。

「はい、これ。持っていきな」

「あ、ありがとうございます」

手に乗せられたのはドロップ缶。その懐かしさに僕はしげしげとそれを眺めてしまう。そして、あのおまじないに使われていたのもドロップだったっけな、と思い出す。おまじない、本当にばあちゃんには覚えていないのかと気になった。どうせこれで会うことが最後かもしれないのなら、聞いてみてもいいんじゃないかと思い、ばあちゃんにたずねる。

「ああ、ちゃんと覚えているよ」

「なら、どうして会った時に言わなかったんですか」

「あたしも、聖治君が覚えているか気になったから、そのことを言われるまで黙ってたんだよ」

それなら、ばあちゃんはずっと覚えていてくれたということか。それが分かると僕はホッとし、心がホワッと暖かくなった。

「確かあの時は、ごっこ遊びの途中で友達とけんかして泣いていたんだってね」

「そうでしたっけ」

そうか、だから僕はごっこ遊びに対してあの考えを持ったんだ。

「そうだドロップ缶もあるしあのおまじないもできるね。でもまだまじないごっこかな？」　まじないごっこ、今までなら分からなかったその本当の意味が今なら分かる。幼い頃やったごっこ遊び、今になってそれが子達なりの成長だと気付いた。つまり、僕はまだまじないごっこだということだ。

あんなに高かった太陽も、少しだけ傾き始めている。そろそろ帰らなくてはと思いながら駅へ向かって歩き出すと、視界の端に道ばたでしゃがんでいる女の子が映った。その姿は、まるで幼い頃の僕のようなだった。僕は、その女の子の前でかがみ込む。

「どうしたんだい？ そんなに泣いて」

「ぐすん。ぐすん…あのね…」

「そっか、友達とけんかしたんだ。じゃあ、ちよつとだけ目を閉じて…」

昔、やってもらったおまじない。目を閉じてあめ玉を口の中に入れる。そして、やさしく、なでるように二回、鼻をつつく。僕がやったそれはただ昔やってもらったものを真似しただけの「まじないごっこ」。それでも目の前の泣き顔はすぐに笑顔になった。

わたしは、もどってまいちゃんに「ごめんね」をいいました。

まいちゃんも「ごめんね」をいって、なかなかおりができました。

こんどまいちゃんと「まじないごっこ」をします。

とつてもたのしみです。

ガタン、ゴトン。ガタン、ゴトン。

あんなに近くに見えた山が、だんだん遠ざかっていく。過ぎゆく景色を見ながら僕は思う。

僕と別れる時、あの女の子は「今度は友達と『まじないごっこ』をするね」と言った。きっと彼女は、まだ気付かないだろう。

それが、未熟ながらも「幸せのカタチ」を作っていけるものだということに。
